

新・下野市風土記

「鑑真和上と下野薬師寺」 栃木県立博物館特別展

下野市教育委員会 文化財課



10月30日(日)まで、栃木県立博物館にて開館40周年記念特別企画展「鑑真和上と下野薬師寺」が開館されています。開館30周年記念では足利尊氏、35周年記念では宇都宮氏と、これまで栃木県に關係のある企画展が催されてきましたが、今回の企画展では時代をさらにさかのぼり、飛鳥時代から平安時代頃の下野薬師寺に關係する内容の特別展示となっています。

さて、今回の新・下野市風土記では、鑑真和上が5回の渡日失敗を乗り越え、ようやく来朝が叶った後の経緯について簡単にまとめます。

67歳の鑑真和上が乗船した遣唐使船は、天平勝宝5(753)年11月に薩摩国(鹿児島県)秋目屋浦に到着します。12年もの歳月と6度目に叶った渡航でした。翌年2月に法進・曇静・義静・法載・思託などの弟子や数名の随員と共に平城京を訪れ、4月には東大寺大仏殿前において受戒の儀を執り行いました。この時、聖武上皇、皇太后、孝謙天皇などのほか、修行中の僧である沙弥など400人余りが受戒したと記録されています。

鑑真和上は来朝以降、天平勝宝7(755)年に東大寺戒壇院の北に設けられた唐禅院に定住しました。それから4年後の天平宝字3(759)年、平城京右京五条二坊の新田部親王旧宅地を賜って戒院をおこし唐招提寺の礎を築き、天平宝字7(763)年5月6日に同院で入滅されています。

ここで不思議なのは、鑑真和上ほどの地位の方が新たな寺院を建立するのに、その寺院が官大寺(公の寺)とされなかったことです。東大寺もそうですが、下野薬師寺も官大寺として公費が投入され、この頃には大改修が行われていました。

唐招提寺の建設用地となった新田部親王旧宅地は、朝廷の斡旋によって取得したのですが、この土地は天平勝宝9(757)年7月に起きた橘朝臣奈良麻呂の乱に、親王の子である道祖王・塩焼王が関与したため没官地(政府により取り上げられた土地)となっていた土地でした。

官大寺でなく私寺として造営したために、財源が乏しく建設の費用もままならず、講堂も払下げされた平城宮の朝集殿(官僚が会議などの執務を行った建物)を移築・改修したものでした。鑑真和上が入滅された時に完成していたと想定されている建物は、この講堂のみであったと考えられています。

天平宝字3(759)年、鑑真和上は東大寺の禅院を、自身の直系の弟子で元は中国揚州白塔寺の僧であった法進に譲り、自らは唐招提寺前身の戒院に数名の弟子たちと移りました。このことにより、鑑真和上の弟子たちは東大寺派と唐招提寺派に分派する形となりました。また同じ頃、鑑真和上が誹謗される事件が起き、弟子の思託は曲解された師の立場を擁護するため、『大唐伝戒師僧名記大和上鑑真伝』を記しています。

鑑真和上が東大寺から唐招提寺へ移ったのは「弟子たちの派閥闘争が原因」とする説が、歴史学者福山敏男氏により問題提起されています。これとは逆に、歴史学者安藤更生氏は「弟子たちの対立は根柢が薄く、和上が誹謗されるほど東大寺との間に問題が生じた」とすると、その原因の一つは、東大寺禅院の(運営経費に)充てられていた備前国(現岡山県)の水田100町を唐招提寺の建立財源に充てたことが原因」と指摘しています。この双方の説に対して、歴史学者齊藤孝氏は「後進に道を譲り、世の俗権から身を退けた和上は、ほぼ60年を経て来た求道の道を改めて静かに反省し、あわせて、多年築き上げて来た自らの学問を最も自由な心境において弟子たちに伝えたいと願いつつ、この寺を拓いたのではなかったろうか。故に世にことさら誇示すべき大伽藍を初期の唐招提寺に求めておらず、伽藍の要である金堂よりも教学の研鑽に必要な講堂が優先して建てられた」と想定しています。

参考文献 齊藤孝1966「唐招提寺と如宝」その美術史的意義 『人文論究』16巻 関西学院大学リポジトリ